

岡部昌生 Masao OKABE

土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)

Memory of the Earth-Image in the Aftermath “Fukushima”

土+紙 110×75cm(12点) ポストカード(12点)

公開制作:京都精華大学芸術学部7号館立体造形コースアトリエ前 2011年7月6日

土の採取:宮岡秀行(採取地:三陸海岸600kmのうち6ヶ所の地点)

立合人:西雅秋 八巻真哉 古郡弘 炭木千尋 二瓶龍彦 祥子 市民 教職員 学生多数

撮影:宮岡秀行



●何億年もの時間を抱えた記憶の層が、激しく揺すられ捲れあがり大地を覆う。記憶の時間がいま、足元の眼前にあることを強烈に想起させ、刻みつけた大津波。自然の、というより時間の逆流、逆襲のような凄味を見せつけ簡単には収束できないとてつもなく大きな力のあることを突きつけられ茫然とする。累々と瓦礫の連なる荒寥とした風景を、被爆後の広島街や空爆で破壊しつくされた光景と重なると報じた記事を見ながら、私の三歳の記憶の底に微かに明滅する根室空襲の光景と私も重ね合わせてしまう。五月に展覧会で訪れたペイルートの中心部、内線とミサイル空爆で破壊しつくされ、瓦礫が堆積する赤褐色の埋立地の光景が地中海の青さに鮮烈に対比する凄味、壁に撃ち込まれた夥しい弾痕が刻まれる廃墟の光景にも連なっていく。(宮岡秀行『微(しるし)はいたる所に』取材メモ)

●「動物的なエネルギーだけで創られたアート」都市の記憶を記録すること。それは、手に触れた感覚をどこかに置きかえる作業です。物に手を触れることは、地に足をつけて、ということ。その手が足元に触れる。土だったり、人の営みの痕跡だったり、出来ごとだったり、記憶を想起することだったりする。それを別なイメージに開いていけば、それは、社会や時代という言葉に置き換えてもいいわけです。自分の足元を、手でつかむという仕事のありようが見えてきます。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「アレゴリーとしての日本と……」タスマニアにしてもペイルートにしても、美術というものの基本的な捉え方ははっきりとしている。人間のやることのある大きな、それこそクライシスに対してどのようにアーティストが反応するのかという、人間の問題を考察するから、そこから生まれたアートというものが大事にされる。私の仕事かそういう思考のなかに捉えられたとしたら、これは美術の問題よりは、人間が美術をすることの問題としても大きなことと考えます。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「ことばを語るのではなく、想起させる仕事」『被爆樹に触れて』も少しづつ変わりながら、樹のまわりの時間、樹の生きている時間も一緒に記録していくことをやり始めています。広島の人たちが一年一年を大事にしながら生きていくのと同じように樹もまた一年一年、生きていることを、樹を通して感じます。樹はことばを発しないだけに、余計そこに美術家として、ことばを語るのではなく、ことばを想起させる仕事をしてみたい。

●「忘れないという抵抗」針生一郎さんが私のテキストのなかで、日本人は「忘れない派」が多い。「忘れない派」は本当に少ないと言う。広島に行っても、被爆樹の仕事をして、広島土をつかいいながら仕事をしていても、やはり「忘れない」という方が多いように思います。美術家はどこに立つのかというは、選択のひとつの立場、態度だと思います。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「触ることによる記憶の引き出し」記憶というのは触ることによって、引き出すことができる。自分のなかに潜んでいるものが紡ぎだされる。手が目のように見て触っている。フロッターージュという仕事が、触覚の直接的な視野ばかりでなく、広がった領域まで刺激するんだと指摘されると、身体というひとつの器がとてつもなく大きなセンサーになりうるんだと感じます。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「風景よりも地質を見ようとする視線」"I know where I'm going" (Ben Rivers)30分の映像が長い時間を体験したような感じがしました。「われわれはどこに行くのかはすでに知っている」、地質学者に語るシーンが断崖とか地層、時間の層の堆積ですね。それを暗示的にくぐり抜けるカメラの目。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「土がもっている時間に手で触れること」いま観ているのは『土の記憶』の制作ドキュメントのスライドショー。1cmの土ができるのには100年かかります。50cm掘り下げた土を流していく。表れてくるのは物質が移動した痕跡だけでなく、物質がもともととらんでいた、土の中にもっていたものが解体されずに残っているもの。細かな粒子とか、水の力によって留まり滞ったりする軌跡。それらを並べ土の流れを見ていくと、人が現われる前史の地表の姿と重なって見ると、建築家の藤森照信さんは話していました。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●「畏れ(怖れ)のないところで、学ぶことはできるのか」私の仕事を支えてくれた8月6日生まれの広島の友人から。「ヒロシマ、ナガサキ、ビキニと被爆した国が原子力発電という核を持つことによって、外からのミサイルや核ではなく、内側からの核の恐怖にさらされている。このことを、いま、たくさんの方が考えないといけないんじゃないか」と。(宮岡秀行さんとの対話「クライシス・オブ・ジャパン 災害/アート/政治的激動をむかえて」から)

●私が採取した一握りの土はこの6ヶ所です。震災から二ヶ月後の「血と砂」です(宮岡秀行)

●「土の記憶—事後のイメージ」6点お送りくださりありがとうございました。日本郵便から「通信事務郵便」の封筒に入れられ届きました。いつものDMかと思ひ、しばらくして開封しびっくり!先生の作品でした。三陸で起こった事、その瞬間が「べたっ」とこびりついた、そんな印象を受ける作品です。(東北へのエール)にこちらにもアップしてよろしいでしょうか。(E-mail 7/21 16:54 川延安直:福島県立博物館)

●ぼくのところにも、郵便局の事務郵便扱いでとどきました。かなり湿り気があって、大地が生(ナマ)のまま届いたような驚きです。ありがとうございます。昨日もまた南相馬に編集者とともに、撮影で訪れていました。(E-mail 7/22 15:40 港千尋)

●太平洋岸6ヶ所の作品はすごいです。そっとします。津波の現場にいたかのような恐さが伝わってきます。ぜひ、福島でも展示をして多くの方に見ていただきたいと思いました。展覧会開催にむけてアンテナを張りたいと思いますが、先生にご協力お願いできますでしょうか。(E-mail 7/28 14:53 川延安直)

●「津波のイメージが想起された。多くの作家が、どう震災を表現するかで立ちすくむなか、勇気を出して記録した貴重な作品だ」(川延安直「被災地の土 爪痕表現 紙に“激変”の記憶」北海道新聞)2011年8月6日)

●活動の記録—紙鏡(2011-2012)

●「さっぽろ昭和30年代—美術評論家なかかわ・つかさが見た熱き時代」2010.10/30-2011.1/30 札幌芸術の森美術館(札幌) ●「MONANISMS」1/21-7/19 MONA (Museum of New and Old Art)/Permanent Collection(ホバート、タスマニア、オーストラリア) ●岡部昌生「諏訪をめぐる、縄文にふれる」3/19-4/3 茅野市美術館/シンポジウム「諏訪の首飾り—縄文にふれる」岡部昌生×港千尋×功力 茅野市民館 ワークショップと展覧会を総合的に展開(茅野) ●岡部昌生アーカイブ展「小さな愛、それは新たな記憶」同時開催「タスマニアのヒロシマ、未来のアーカイブ—報告展示」4/12-17 art space HAP(広島) ●「出会いと創造」4/16-5/22 北海道立近代美術館(札幌) ●「鯉アートのほり」4/25-5/31 福島大学・各都市巡回(福島) ●開学50周年記念特別公開講座(人生と芸術×宮岡秀行×佐藤友哉×港千尋×杉山留美子×巖城孝憲×中嶋義明×木村雅信×福島榮寿)5/7-8/6(札幌) ●「Image in the Aftermath」200点の「わたしたちの過去に、未来はあるのか」2点の「戦禍の瓦礫、埋立地の土」5/17-7/16 Beirut Art Center(ペイルート、レバノン) ●シンポジウム「ふくしまで語る FUKUSHIMA」港千尋×やなぎみわ×三瀬夏之介 ゲスト出演 7/3 福島県立博物館(福島) ●「岡部昌生 自らの作品を語る」わたしたちの過去に、未来はあるのか、西雅秋×山田創平×岡部昌生「事後のイメージ—土の記憶」東北震災地区6ヶ所(三陸海岸600km)の土によるドローイング公開制作 7/3-6 京都精華大学(京都) ●「港千尋の集中講義・イメージ論」ゲスト講義 7/7 日東大学法文二号館(東京) ●高文連網走支部第56回美術展研究大会ワークショップの指導と講評「森ニイマス」8/24-26 北網走北見文化センター美術館・野付牛公園(北見) ●岡部昌生のトークと映像「大人になったら芸術家になりたい。16歳の少年は答えた」札幌大谷大学短期大学部美術科オープンキャンパス特別講座 9/17(札幌) ●「おぼけのマールと絵のふしぎ」10/29-2012.1/15 北海道立三岸好太郎美術館(札幌) ●岡部昌生を追ったアートドキュメント映画「微(しるし)はいたる所に LES SIGNES PARMINOUS」(出演:岡部昌生 港千尋 石丸勝三 Victor Erice ほか 制作:スタジオマラルバルテ 提供:Art Square 撮影:宮岡秀行 音楽:鈴木明男 LUIGI NONO GIACINTO SCELSI ROBERT SCHUMANN) ●「微はいたる所に」特別上映会/岡部昌生+宮岡秀行+八巻真哉 11/15 京都精華大学(京都) ●講演とワークショップ「生でふれようアーティストin大教大」11/15-17 大阪教育大学 金剛・生駒・紀泉の森(柏原) ●「谷の会46回展」11/22-27 大丸藤井セントラル(札幌) ●北海道造形教育研究会プレ・ワークショップのガイダンス「オ・ベレベレ・ケブ」12/17-18 帯広市立帯広第五中学校、水光園ほか(帯広) ●「koi鯉アートのほり」2012.3/14-4/4 福島空港(福島) ●「さきは3.11を見たか?」3/17-25 旧日本銀行広島支店(広島) ●「ひろしまマジン大学講座」3/17旧日本銀行広島支店(広島)



「土の記憶」土の採取場所地点を示す地図(北海道新聞2011年6月5日)

「土の記憶」土の採取地：三陸海岸600kmの6ヶ所
写真撮影：宮岡秀行 提供／©：Art Square

①岩手県九戸郡野田村 海岸線線路脇にて採取，2011年5月10日夕方

②岩手県宮古市田老 倒壊し瓦礫の集積場となった田老球場内にて採取 5月11日午前

③岩手県上閉伊郡大槌町 大津波被害に耐えた山側より採取 2011年5月11日午前10時過ぎ

④岩手県陸前高田 高田松原生き残りの一本松近辺にて採取 2011年5月11日午後2時過ぎ

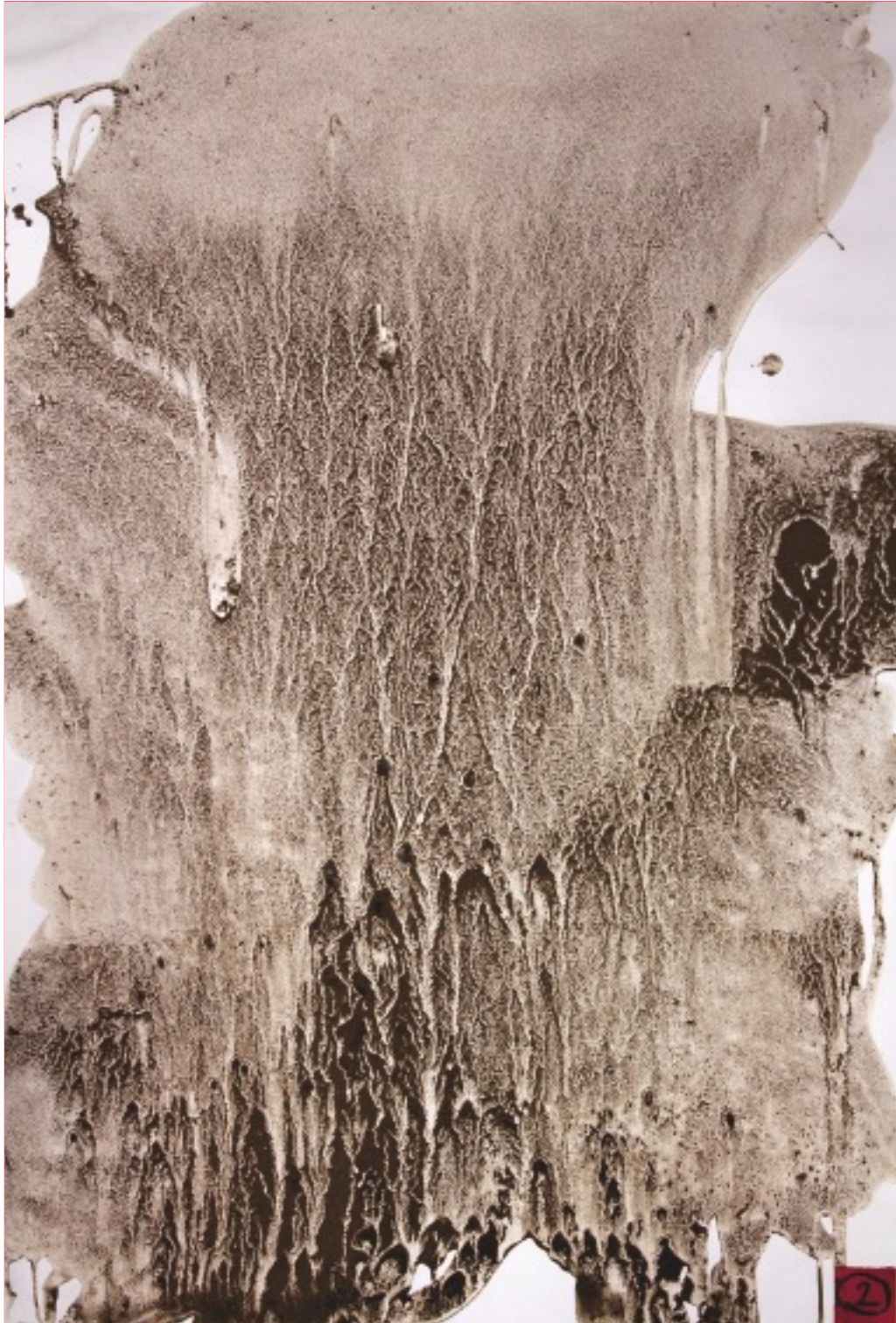
⑤宮城県気仙沼市 火災の発生した鹿折唐桑駅前 2011年5月11日午後5時過ぎ

⑥福島県南相馬市福島第一原子力発電所半径30km範囲内避難区域エッジ 2011年5月12日 午後2時過ぎ





①「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
岩手県九戸郡野田村
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



②「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
岩手県宮古市田老
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



③「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
岩手県上閉伊郡大槌町
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



④「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
岩手県陸前高田
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



⑤「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
宮城県気仙沼市
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



⑥「土の記憶—事後のイメージ(フクシマ)」
福島県南相馬市福島第一原子力発電所半径30km範囲内避難区域エッジ
採取者:宮岡秀行
キャンソン紙 110×75cm 2011年
写真提供:京都精華大学情報館メディアセンター



1



4



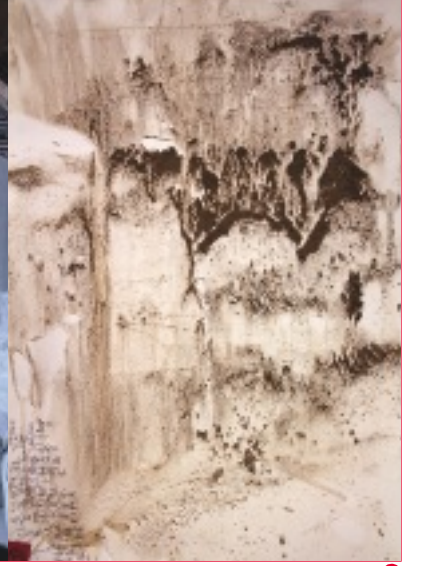
2



5



3



6